

## 智光の淨土教思想に就いて(下)

戸松 憲 千代

(七) 其他の諸問題(曇鸞の『論註』と智光の

『論釋』との相異點に注意して)

淨音(悟阿?)の『刪補鈔』及び堯慧の『私集鈔』等を見ると、智光『論釋』の全體的價値を批評して、

「難<sub>シ</sub>依<sub>ニ</sub>用<sub>レ</sub>彼<sub>ノ</sub>釋<sub>ヲ</sub>。所以何、今見<sub>ニ</sub>彼<sub>ノ</sub>釋<sub>ヲ</sub>始<sub>ニ</sub>終<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>三<sub>ノ</sub>個<sub>ノ</sub>疑<sub>ヲ</sub>。併乍<sub>ニ</sub>引<sub>ニ</sub>用<sub>レ</sub>此<sub>ノ</sub>註<sub>ノ</sub>文<sub>ヲ</sub>(曇鸞『論註』)、或前後亂脫、或稍以<sub>ニ</sub>言<sub>ヲ</sub>詞<sub>ヲ</sub>、此註釋(曇鸞『論註』)上作<sub>ニ</sub>彼<sub>ノ</sub>疏<sub>ヲ</sub>(智光『論釋』)」。似<sub>キ</sub>無<sub>ク</sub>評<sub>價</sub>用<sub>ス</sub>。乃至往生要集、拾因等舉<sub>テ</sub>世<sub>ノ</sub>習<sub>ヲ</sub>之<sub>ヲ</sub>而<sub>シ</sub>學<sub>ブ</sub>彼<sub>ノ</sub>疏<sub>ヲ</sub>稀也。仍難<sub>ニ</sub>依<sub>レ</sub>用<sub>ス</sub>耳。」

と、又

「凡<sub>レ</sub>彼<sub>ノ</sub>師<sub>ノ</sub>(智光)釋、全依<sub>ニ</sub>註<sub>ノ</sub>家<sub>ノ</sub>(曇鸞)」。]

等と論じてゐる。これに依つて、先輩の多くは智光の『論釋』を以て曇鸞の『論註』をそのまま踏襲して、即ち曇鸞以上に出づるものでないと言及してゐる。なるほど、彼の『論釋』を點檢すれば、鸞師の『註』と殆んど同一の文、或はその文字に多少の變化はあつても意味には變りのない文等が多く見受けらるる。従つて、『刪補鈔』や『私集鈔』の批評も強

ちに否定すべきでない。然しながら、前六章に於いて吾人の述べ來りし諸種の問題、及び次下に紹介するであらう如き種々の事項は、すべてこれ曇鸞に見得べからざる智光獨特の發揮説たるものである。仍つて、吾人は智光に何等の發揮説なしとして、これが研究をなほざりにすべきでない。然らば、智光の發揮説とは前六章のそれ以外に何んなものがあるであらうか。以下、それにつき吾人の氣附けるところを纏めておかう。

(A)『淨土論』の異本(曇鸞所覽の『淨土論』と智光のそれとが異本であつたらしい點)

曇鸞は『論註』に未證淨心の菩薩と淨心のそれとに關する、

「即見ニ 彼佛 未證淨心菩薩畢竟得證平等法身。與淨心菩薩與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故。」

なる論文を引用してゐる。然るにこの所、智光の『論釋』(對照表)には

「即見ニ 彼佛、未證淨心菩薩與淨心菩薩得證平等法身故。淨心菩薩與上地菩薩畢竟同得寂滅平等故。」

等となつてゐる。従つて、こゝに『論註』所引の論文と『論釋』所引のそれとが歴然として相異つてゐることが知らるゝ。

仍つてかゝる點より考ふる時、かの堯慧がその著『私集鈔』に、

「未證淨心等事、論文有異本。」

と指摘せるが如く、即ち曇鸞所覽の『淨土論』と智光のそれとが異本ではなかつたかと推測さるゝ。

思ふに、天親の『淨土論』は單譯ではあるが左の如き三種の異本があつたものゝ如くである。

(一)七祖聖教本。

現行七祖聖教本(6b)に依れば、右未證淨心及び淨心に關する論文は次の如くである。

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

「即見ニハタツツレバノヲ彼佛ヲ未證淨心菩薩畢竟得スルコトヲ證ニ平等法身ヲ。與ニ淨心菩薩ニ與ニ上地諸菩薩ニ畢竟同得ニ寂滅平等ヲ故。」

(二) 明藏本(彙藏所載)

この點明藏本には左の如くある。

「即見ナレバノヲニ彼佛ヲ、未證淨心菩薩畢竟得ズ平等法身ヲ與ニ淨心菩薩ニ無レ異ルコトヲ淨心菩薩與ニ上地諸菩薩ニ畢竟同得ズ寂滅平等ヲ故。」

(三) 高麗本(縮藏所載)

これは右明藏本に同じ。

かくて、右三種の異本に對檢するに曇鸞の所覽本は(一)の七祖聖教本に相當することを知る。然しながら、智光のそれはこれ等三本の何れにも契當し得ぬ。従つて、彼の所覽本はこれ等三本以外のものであつたかも知れぬ。然し、彼は『淨土論』の未證淨心菩薩を地前と決定するに道綽の『安樂集』を承けたもの、如く、即ち彼の『論釋』(對照表)を見らんと、

「初地已上菩薩法性生身。即是正智處中妙行。亦是變易生死法身。中略(未證淨心菩薩者)如安樂集意、未證淨心名ニ十方人天ト。即是地前凡夫也。」

等とこれを指示してゐる。更に、この點〔註九〕私集鈔〕は、

「智光疏安樂集未證淨心思ニ地前ト。今依ニ論文ニ可ニ未證淨心七地、淨心八地、上地九地ニ有ニ註釋ヲ攷。」

等と説明を與へてゐる。

かくて、これ等に依つて智光が『安樂集』の提擧を承けしことは間違ひないが、然らばその『安樂集』には一體これが如何に表示されてゐるであらうか。今、『刪補鈔』の指示するところに従つて、これを見れば即ち次の如くある。

「淨土論云、十方人天生彼國者即與淨心菩薩無一淨心菩薩即與上地菩薩畢竟同得寂滅忍。故更不退轉。」

右『安樂集』に引ける論文は上三種の異本の何れにも契當せざるものではあるが、恐らくこれは上の(一)(二)明藏本(三)高麗本のそれを取意したものでなからうか。果して然らば、『刪補鈔』が、

「勸唐本論云、即見彼佛未證淨心菩薩畢竟得本等法身與淨心菩薩無異。淨心菩薩與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等故矣。又道綽師依彼本(唐本)見安樂集云……」

等と指示せる如く、道綽の所覽本は曇鸞所覽のそれとは異り、寧ろ明藏本或は高麗本に相當するものなることが推測さる。而して、『刪補鈔』が又、

「義寂師、智光師同安樂集也。」

と指示してゐる如く、智光の『論釋』が已に『安樂集』に同するものとすれば、即ち智光の所覽本は亦明藏本及び高麗本等に一致するものであるかも知れぬ。然し、吾人としては今のところ何としても如上三本の何れとも異つた、全く別本と見るが穩當の如く思惟せられてならぬ。諸賢の是正を仰ぎたいものである。

次に、曇鸞所覽の『淨土論』に依れば、その總結分に、

「無量壽修多羅優婆提舍願生徧略解義竟。」

とあつて、一論の全體を終つてゐる。然るに、智光の所覽本に依れば、このところ猶ほ論文あつて、即ち『論釋』(對照表)

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)



を見ると、

「論曰、阿彌陀佛國土一切殊勝妙事、彌陀法王一切功德願藏、諸大心人一切所修行法、悉集往生願徇修多羅章句中、今於優婆提舍中略解說願西方阿彌陀佛國論。」

等とある。而して、これが正しく『淨土論』の文であらうことはすでに「論曰」とあり、次いで下に「釋曰、此第三明結造論之竟。云々」と、彼自らの私釋を提擧して居るに徴して明かである。

かくて、智光所覽の右論文は如上の三種異本の何れにもこれを見得べからざるものであつて、従つて吾人の「智光の所覽本は如上三本の何れにも異なる全くの別本ならん」と云へる論理は、こゝにその妥當性を深むることゝなるであらう。それは兎に角として、智光の所覽本が曇鸞のそれと異本なりしことはこれを想像するに難くない。されば、『刪補鈔』や『私集鈔』もこれを指摘して、

「私云、彼所釋本上二行余論文在之而無量壽修多羅等之文無之歟見。異本故聞。然彼本委細信心自催歟。」

と、また

「智光所引異本也。」

等と、智光の所覽本と曇鸞のそれとの異なることを適評してゐる。

なほ、智光所引の右論文については、これは單なる吾人の臆測に過ぎぬことではあるが、『淨土論』の翻譯後何人が更に加筆したものでなからうか。別人の加筆せるものを智光は論主の造語と誤つて、これを依用したものでなからうか。事實、右六十有餘字の引文は、これを精細に檢する時、構文の下劣なるものあつて到底論主自身の造語として

は是認し難きものがある。特に「一切功德願藏」及び諸菩薩を意味する「諸大心人」等の如き言葉は『浄土論』中その例なきものにして、即ち天親の造語とは何としても受取れぬところがある。仍つて、吾人に於いては後人の加筆と見たいものである。然し、それは別として今の所論たる曇鸞の所覽本と智光のそれとが異本であつたらしいことは何處までも吾人の主張するところで、この點特に御叱正を仰ぎたい。

かくて、智光は『刪補鈔』や『私集鈔』が指摘せる如く『論註』をそのまま踏襲せることではあるが、一面右の如く彼が曇鸞の『論註』を見ながら、而も『論註』所引の『浄土論』に依らず、これを他の異本に求めしことは、これ智光が必ずしも曇鸞を盲目的に踏襲せるものでないと云ふことを暗示するものではなからうか。

(B) 『浄土論』に對する二師の科文の相違

『浄土論』に對する『論註』と『論釋』との科文が相異してゐて、従つて智光は必ずしも曇鸞をそのままに盲従したるものでないと云ふことを論ずるがこの一節である。(なほ、『論』及び『論註』の頁數及び行數は可西上杉兩師の校訂本に依る。)

(1) 『論註』(卷上<sup>338</sup> p. 1.) を見ると、

「此論始終凡有<sup>ニ</sup>二重<sup>ト</sup>。一是摠說分、二是解義分。乃至所以爲<sup>ニ</sup>二重<sup>ト</sup>者有<sup>ニ</sup>二義<sup>ト</sup>。偶以<sup>ニ</sup>誦經<sup>ト</sup>爲<sup>ニ</sup>摠攝<sup>ト</sup>故。論以<sup>ニ</sup>釋解<sup>ト</sup>爲<sup>ニ</sup>解義<sup>ト</sup>故。」

とあり、又同卷下(p. 1.)には

「論曰已下、此是解義分。此分中義有<sup>ニ</sup>十重<sup>ト</sup>。一者願偈大意、二者起觀生信、中略<sup>ニ</sup>三者利行滿足<sup>ト</sup>。」

とある。これに依れば、『浄土論』を分別するに曇鸞は、先づ摠說分と解義分との二重を設け、就中その解義分より直

ちに願偈大意以下の十科を立つるものである。ところが、『無量壽經論釋』(對照表No.34)を見ると、

「第二明隨義解釋分。大爲三別。一結前許說、二隨義解釋、三結造論竟。此是第一結前許說。」

と云ひ、また

「釋曰、此第三明結造論竟。」

等と云つてゐる。右に依れば、曇鸞が解義分より直ちに願偈大意等の十科を立つるに反し、智光はその隨義解釋分より先づ(一)結前許說(二)隨義解釋(三)結造論竟の三重を設けて、然る後にその(二)隨義解釋より曇鸞と同じく十科を提擲してゐるのである。従つて要之、曇鸞の解義分の下に更に結前許說等の三重を分科せしめたるところに智光の發揮説が存すると云ふべきである。

(2) 次に見るべきは、『淨土論』(p.1.5)の「無量壽修多羅章句我以偈誦擲說竟」に對する二師分科の相異點である。

思ふに、この論文に對して『論註』(p.1.8)には何等の説明を與へてゐないから、つきりしたことは分らぬが、然し上

(p.1.8)には「此論始終凡有二重。一是擲說分、二是解義分。擲說分者前五言偈盡。是。解義分者論曰已下、長行盡」

とあり、又下(p.1.3)にも「論曰已下、此是解義分。此分中義有三重。」等とあるから、これ等に依つて曇鸞の意

の在るところを略ぼ推測することが出来る。思ふに、曇鸞は第一の擲說分を上卷に、第二の解義分を下卷に按配せし

め、而も今の所論たる「無量壽修多羅」云々の論文をその上卷に配屬せしめて居るから、従つて彼の意に従へばこれは

當然第一の擲說分に屬するものと見做されねばならぬ。加之、すでに曇鸞自ら第二の解義分を説明して「解義分者論

曰已下」とか又「論曰已下、此是解義分。」とか等と云つて居るに徴して、その第一の擲說分に屬することは論を俟た

ざるところである。若し、曇鸞にこれを第二の解義分に屬せしむるの意ありとすれば、右『論註』の二文は、當然「解義分者、無量壽修多羅章句已下」と又「無量壽修多羅章句已下、此是解義分。」等とあらねばならぬであらう。

かくて、曇鸞は天親の「無量壽修多羅章句」云々の論文を第一の摠説分に屬せしめたことであるが、智光は然らず。

これを却つて第二隨義解釋分中の結前許説の一科に屬せしめてゐるのである。即ち、『論釋』(對照表)を見ると、右「無量壽修多羅」云々の論文を押さへて、

「釋曰、自下第二明隨義解釋分。大爲三三別。一結前許説、二隨義解釋、三結造論竟。此(無量壽修多羅章句)云々の論文を指す)是第一結前許説。」

等と解釋してゐる。

されば、右論文に對する二師の科文は、その是非の問題は暫く措いて、その全く相違してゐることは已に『私集鈔』(註一〇六)等が、

「無量壽修多羅等者、此十五字屬長行義在之歟。智光師釋長行表釋。」

と指摘してゐることにて、何人と雖も否定し得ざるところである。

(3)『淨土論』の觀行體相章を分科して、『論註』(72.9)には

「觀察體相者、此分中有二體。一者器體、二者衆生體。器分中又有三重。一者國土體相、二者示現自利利他、三者入第一義諦。」

等とある。而して、右『論註』には器體中の第一分國土體相に就いては、これ以上何等の分科も施されてゐない。然る

にこの所、智光の『論釋』(對照表)には更に三段の分科があつて、即ち左の如く論じてゐる。

「(就<sup>ニ</sup>此國土體相<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>分<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>段<sup>ニ</sup>。云<sup>ク</sup>)一顯成就義、成就不可思議 二列二十七名 觀察彼佛國土滿 三順釋體相 莊嚴清淨 相對法故是也 足功德成就也 功德成就

著已下也」

かくて、國土體相中に(一)顯成就義(二)列十七名(三)順釋體相等の三科を立つることは、曇鸞の上に更に見得ざるどころ、これまた智光特有の發揮説とせねばならぬ。

(4)右(3)の器體に對して、佛(主)及び菩薩(伴)等の莊嚴を衆生體と呼ぶ。今、『論註』(p. 1. 5)はこの衆生體に就き「衆生體者、此分中有二重。一者觀佛、二者觀菩薩。」

等と二科を施してゐるが、就中第一重の觀佛に就いては何等の分科をも提擲して居らぬ。然るに、智光はこのところ更に(一)列名(二)順釋(三)顯次第等の三科を設けてゐる。即ち、『論釋』(對照表)には

「此(觀佛)有三重。列名、順釋、顯次第也。」

とある。智光の發揮説、また見るべきものがあるであらう。

(5)『淨土論』の淨入願心章を、『論註』(p. 1. 7)には「已下是解義中第四重。名爲淨入願心。」

と云へるので、何等分科の提擲を見得ない。然るに、智光の『論釋』(對照表)には

「第四淨入願心即分爲二。一因果相成、二入一法句。此(又向說觀察莊)已下の論文(p. 1. 4)を指す。是第一因果相成。」

と云ひ、更に同(10.60)にも、

「此(略説入ニ法句ニ故)已下の論文(p.1.5)を指す。第四淨入願心之中、第二入一法句。」

等とあつて、即ち淨入願心に就いて(一)因果相成(二)入一法句の二科が施されてゐることを知る。

かくて、『淨土論』に對する曇鸞・智光兩師の分科が相當多分に異つてゐることを知るのであるが、最後に吾人は智光の淨土論分科の概要を左に掲げ好學の士の資便に供しよう。必ずや、曇鸞のそれと對比して、二師分科の相異點を究明せられんことを切望して止まぬ。

淨土論(一)

(一)總説分……………世尊我一心以下(p.1.1)

(二)明隨義解釋分(三)

一結前評説……………無量壽修多羅章句……………p.1.5

二隨義解釋(十)

(一)願徧大意……………論曰此願徧明ニ何義……………p.1.6

(二)起觀生信……………云何觀云何生ニ信心……………以下(p.1.7)

(三)觀行體相(二)

(一)器體(三)

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

一國土體相三一

一顯成就義……………云何觀<sub>三</sub>察彼佛國土莊嚴功德以下 p. 24 l. 3

二刻十七名……………觀察彼佛國土以下 b. 24 l. 4

三順釋體相……………一者莊嚴清淨功德以下 p. 24 l. 5

(二)示現自利他……………略說彼阿彌陀佛國土以下 p. 26 l. 4

(三)入第一義諦……………彼無量壽佛國土莊嚴以下 p. 26 l. 6

(二)衆生體二

一觀佛

一列名……………何等八種一者莊嚴座功德以下 p. 26 l. 7

二順釋……………何者莊嚴座功德成就以下 p. 26 l. 10

三顯次第……………略說三八句示現如來自利他以下 p. 27 l. 6

(二)觀菩薩……………云何觀察菩薩莊嚴以下 p. 27 l. 6

四淨入願心二

一因果相成……………又向說觀察莊嚴佛土以下 p. 28 l. 4

二入一法句……………略說二入一法句之故以下 p. 28 l. 5

p. 28 l. 5

〔五善巧攝化〕……………	如是菩薩以下 <sup>28</sup> p. 1.10
〔六障菩提門〕……………	菩薩如是善以下 <sup>29</sup> p. 1. 2
〔七順菩提門〕……………	菩薩遠離以下 <sup>29</sup> p. 1. 6
〔八名義攝對〕……………	向說智慧慈悲方便以下 <sup>29</sup> p. 1.10
〔九願事成就〕……………	如是菩薩智慧心以下 <sup>30</sup> p. 1. 1
〔十利行滿足〕……………	復有五種門漸次以下 <sup>30</sup> p. 1. 4
三・明・結・造・論・竟……………	阿彌陀佛國土以下六十四字

〔附記〕 ●印は智光の『論釋』に見ゆるもの。即ち正しく智光の分科せるところである。( )内は『論』及び『論註』に參檢して私に補足せるものである。

(C) 智光の『大經』別申説に就いて

『淨土論』の表題「無量壽經優婆提舍願生偈」なる「無量壽經」に就き、曇鸞は

「無量壽是安樂淨土、如來別號。釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中説無量壽佛莊嚴功德。」

等と三經通申の説を立て、居る。ところが、この點「論釋」(對照表)には大經別申説を提擲して、即ち

「修多羅者、無量壽經有二三卷。則以此經爲修多羅。」

等と主張してゐる。二師見解の相異、これを知るに難くない。

因に、『刪補鈔』は右智光の大經別申説を批評して三義を立て、るが、就中初め二義は吾人の一考するに足るもの

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)



があるから、それを紹介して置かう。

「智光釋限大經見。今付ニ彼(智光)釋ニ存ニ義。一題名無觀字ニ故爲ニ略文字、以ニ此題且屬ニ大經、引ニ彼文此經標。爾非不通ニ二經也。二彼師意、此論三經中大經爲正、一經爲傍。仍約正引大經。此經書歟。」

かくて、『刪補鈔』の論理はその見るべきものもあるも、然し恐らくは表題に己に「無量壽經優婆提舍」云々とあるから智光はこれを押さへて軽く『大經』と見解したものであらう。なほ、道宣の『大唐内典錄』、智昇の『開元釋教錄』、圓昇の『貞元新定釋教目錄』等にはすべて大經別申説が提唱せられてあり、而も此等は共に己に奈良朝時代には我が國に傳來せるもの、如くであるから、従つて智光はこれ等を依據としたのかも知れぬ。

#### (D) 智光の五劫修行論

『大經』上卷に「具足五劫思惟攝取莊嚴佛國清淨之行」なる經文がある。この經文の「五劫」に就いて曇鸞は何等の解説も施してゐないが、古來淨土の諸家はこれを以て或は法藏の修行の時間と論じ、或は思惟の時間と主張してゐる。而して、かゝる五劫は修行なりや思惟なりやの問題は後年法然門下に於ても論議のあることにて、日本淨土教理史上注目すべき事柄であるから、以下これに就いて智光が如何に見解してゐたかを紹介することとする。

即ち、『無量壽經論釋』(對照表)を見ると、

「過五十三佛已。有佛名曰世自在王佛。法藏比丘時發心。從發心。五劫修行後。起四十八願。造此土鏡。」

等とあつて、己に「五劫修行」と云へるより見れば、その五劫修行説に左祖してゐることが領解せらるゝ。蓋し、支那

に於ける淨土教諸家の多くは大體智光と同じく右五劫修行説を取つてゐる。即ち、彼が最もその思想的影響を承けたと見做さるゝ淨影や嘉祥が矢張りさうである。先づ、淨影はその『無量壽經義疏』に於いて、

「具五劫下明修行。於中初明法藏比丘五劫起行。阿難白下中略法藏於彼佛所五劫修行。乃至故彼法藏於一身中在彼佛所五劫修行。」

等と五劫修行説を創唱してゐる。又嘉祥の如きも、これに左祖して同じく『無量壽義疏』に、

「時彼比丘下、是第五重明法藏依教修行。自有四段。初正所依教修行意至佛所自陳。中略就初亦可爲一。初正明修行。明往彼佛所自陳行之意。即初於五劫中修行發願也。」

等と論じてゐる。尤も、嘉祥に在つては「於五劫中修行發願也」とあるから、修行に即して思惟をも肯定する如くであるが、前後の釋勢より推してその修行の方を重視してゐたことは否み難い。されば、智光の五劫修行説は淨影・嘉祥の二師を相承せるものと見て先づ誤りないであらう。

因に、法然や親鸞は勿論五劫思惟説を主張するものであつた。従つて、かく淨影や嘉祥を繼承して五劫修行説に左祖せる智光が、後世淨土宗の諸匠に依つて非難攻撃さるゝに至りしことはまた止むを得ざるところであらう。今、その一例を擧ぐるならば良榮の『淨土宗要集見聞』に

「此智光疏得意惡。發願五劫、修行兆載永劫也。而五劫修行後云發四十八願事難得意。」  
（なほ、これに就いては作者未詳『淨土宗要集見聞』）  
（淨念十一思に詳し。參照せられ度し。）

然るに、元祖門下に在つても猶ほ智光に左祖して、所謂五劫修行説を主張するものがある。これ云ふまでもなく、

九品寺流覺明房長西の『五劫思惟諍論鈔』一卷の所立である。今、便宜上『淨土源流章』に云ふところを掲ぐれば、

「澄空理圓兩上人者、宗研天台、說法流美。兼隨長西習學淨教。法藏比丘五劫思惟、唯思修行、兩哲諍論。

西公作章、名五劫思惟諍論鈔、決判兩莫諍論。即決判云、五劫修行、非唯思念。淨影等師、如是判故。」

等とあつて、即ち長西が淨影等の諸師を承けて五劫修行説に左袒せることが知らるゝ。而して、吾人はこゝに「淨影等師」とある等の字の中に智光の『無量壽經論釋』の存することを見たいのである。思ふに、長西が智光の『論釋』を見てゐることは、彼の著『淨土依憑經論章疏目錄』及び同じく彼の著たる『往生論註疏』等に徴して間違ひないから、恐らく右吾人の見解は妥當なるものであらう。果して然らば、智光の五劫修行論は彼の『觀經』三心觀と共に九品寺流の先驅をなせるものと云ふべきか。

(E) 「起觀生信」に對する智光の見解。

『淨土論』の「起觀生信」を解して、智光は『論釋』(對照表)に

「觀者是解、信者是行。然先有解方能興行。行中以信爲第一故今舉信心。言起觀者繫一念一處諦觀、彼國。如觀門言、一々觀之極令一々云々。言生信者諸有衆生聞阿彌陀佛名信心歡喜乃至一念皆得往生、唯除謗法。況復具修諸善根。」

等と、これをいと懇切に説明してゐる。然るにこの所、曇鸞の『論註』には唯だ

「起觀生信者此分中又有二重。一者示五念方、二者出五念門。」

等と分科してあるのみで、別に何等の説明も施してない。即ち、こゝに觀を以て解(安心)に配し信を以て行(起行)

に屬せしめ、加之生信を釋するに十八成就の文を以てせる等は、これ實に智光の獨創說と云ふ可く、曇鸞の上には全く見得べからざることである。尤も、右智光の觀は解、信は行と云へる對配に就いては異論のあることにて、即ち鎮西派の良忠の如きは、

「又就起觀生信二分別安心起行者、起觀是起行生信是安心。又分三別解行者起觀是行、生信是解。然智光疏云、觀者是解、信者是行。中略。此釋(智光疏)似有前後相違。謂上以起觀屬解、以生信屬行。下判起觀云諦觀彼國、以生信屬稱名。諦觀豈非定行。又若約三元意稱名雖要而至今文既信三念。豈局稱名。」  
等と、これを非難してゐる。これ、恐らくは善導流の思想に従つて觀は行(起行)、生信は解(安心)と見解し、以て智光の觀は解、信は行と云へるを破したものであらうが、それにしてもこれが智光の創說たることに變りはない。

#### (F) 智光の『觀經』三心觀

『無量壽經論釋』(對照表)を見ると、智光は『觀經』の三心を釋して次の如く論じてゐる。  
「觀經中明三九品往生之事。先定往生因者、如上品上生人發三種心即得往生。其三種心者、一是至誠心、二者是深心、三是廻向發願心。依馬鳴說此三心在十解初心。彼言直心即今至誠心。深心同之。彼云大悲心即今廻向發願心。」

これ、『觀經』の三心を『起信論』のそれに會合したるものであつて、また曇鸞には全く見得ざるところである。而して某氏の說にかゝる智光の三心觀は恐らく智禮の『觀無量壽佛經疏妙宗鈔』に據るものならんと論じてある。成る程、

『妙宗鈔』(注一六)を見ると、

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

「言ニ至誠等三心者、此與起信論中三心義合。彼云、一者直心正念ニ眞如二故、二者深心樂集ニ一切諸善行三故、三者大悲心欲拔一切衆生苦二故。」

とあつて、『觀經』の三心を『起信論』に配當してある。然しながら、『妙宗鈔』の著者知禮は智光(一三三八)に遅るゝと約二百五十年、即ち宋の太祖建隆元年(皇紀一六二〇)に生れて仁宗の天聖六年(皇紀一六八八)に死んでゐるから、従つて某氏の云ふが如き奇怪な論理は何としても肯定し得ない。思ふに、これは迦才の『淨土論』に據れるものゝ如く、即ち該書には、

「如上品上生人、發三種心即得往生。其三種心者一是至誠心、二者是深心、三是廻向發願心。此之三心依起信論判、在二十解初心。如起信論云、信成就發心在二十信終心也。發三種心始入二十解位中。三心者一是直心、謂正念眞如法二故。即是觀經中至誠心。至誠與直心義同名異耳。中略二是深心、觀經亦名深心。三是大悲心、觀經名廻向發願心。若無大悲即不能發願廻向。此亦義同名異也。」

等とある。されば、智光の『觀經』三心觀は彼の念佛觀及び阿羅漢初地說等と共に、矢張り迦才を承けたと見るべきであらう。

なほ、かゝる『觀經』の三心を『起信論』のそれに會合する智光の見解は、後世良源や長西の三心觀に影響を及ぼすこと多大なるものなれば、此の點特に附記して置く。

(G) 未證淨心の菩薩に對する二師見解の相異點(附。法性生身及び無垢輪のこと)

『無量壽經論釋(對照表)』を見ると、智光は『淨土論』の「未證淨心菩薩」を釋して

「未證淨心菩薩者」如安樂集意、未證淨心名十方人天。即是地前凡夫也。」  
等と、『安樂集』に依據して地前の凡夫と見解して居る。然るに、この點曇鸞は

「未證淨心菩薩者、初地已上七地已還諸菩薩也。」

と、地上に解して居る。即ち、曇鸞が初地已上七地を未證淨心、八地を淨心と決定せるに對し、智光はこれに反して地前を未證淨心、初地以上を淨心と決定せるものである。二師の見解、また必ずしも一致せざることを知るであらう。

(如上(A)  
項を參照。)

又、『淨土論』の「平等法身」とあるを『論註』に

「平等法身者八地已上法性生身菩薩也。」

と云へるに反し、『論釋』(對照表)には

「初地已上菩薩法性生身。即是正智處中妙行。亦是變易生死法身。」

等と論ぜられてある。二師見解の相違、また見るべきものがあるであらう。

更に、『論』の「無垢輪」の義を解して、『論註』には、

「八地已上菩薩常在三昧。以三昧力身不動本處而能遍至十方供養諸佛教化衆生。」

と、八地以上の菩薩の力用としてゐる。然るに、『論釋』(對照表)には

「初地已上菩薩亦能以此法輪開導一切。」

等と初地已上に解してある。これ、智光獨創説の隨一たるものである。

因に、右「無垢輪」に對する智光の見解に就いては、『淨土論註記』、『註論刪補鈔』、『往生論註私集鈔』、『論註略鈔』等の諸著に種々批評されてあることなれば、好學の士の參檢あらんこと切望する。

その他、兩師に於ける思想上の相異點に就いては、即ち曇鸞が慈を拔苦、悲を與樂と解せるに對し、智光が慈を與樂、悲を拔苦と釋せるが如き、又曇鸞が舊譯の龍樹を依用せるに對し智光が新譯の龍猛を使用してゐるが如き、數へ擧ぐれば實に枚擧に遑がない。然し、それ等の諸點の一々に就いては卷尾附録の對照表に讓ることゝして、大體如上吾人の紹介せるところに依つて智光が必ずしも曇鸞を盲從せるものにあらざることを了解して頂けると思ふ。

### む す び

以上、甚だ粗漫ではあるが、智光に於ける淨土教思想の全體的内容を大體に論究し盡したと確信する。然し、こゝに本稿の結語として再び言はまほしきは、智光の淨土教思想は曇鸞の『論註』を中心資材としたものではあるが、決してそれを盲目的に追從せるものでないと云ふことである。彼は、當時としては能ふ限りの努力を拂つて諸種の文檢を漁り、以て彼の教學體系を大成したるものである。即ち、『無量壽經論釋』の現在殘存してゐる僅かばかりの斷片的な記事に徴しても、已に彼が曇鸞の『論註』の外に淨影の『觀經疏』、天台(?)の『十疑論』、嘉祥の『觀經疏』、道綽の『安樂集』、迦才の『淨土論』等を素材として『論釋』全五卷を著述してゐることが窺知さるゝ。

されば、吾人は古來云ふが如く智光の淨土教思想を曇鸞以上に出でざるものとして、これが研究を放棄すべきでない。加之、彼の『論釋』は本邦淨土教史上に於ける最初の述作として、それだけでも裕に研究の價值あるものである。

況んや、後世慈惠等の淨土教思想上に大なる影響を及ぼせるに於いては、これが研究の重要性を偲ぶに足るものがあるであらう。

〔註九五〕 『註論刪補鈔』(一 6b)

〔註九六〕 『往生論註私集鈔』(一 8b)

〔註九七〕 『往生論註』(下 19a)

〔註九八〕 『往生論註私集鈔』(六 36a)

〔註九九〕 同(六 26a)

〔註一〇〇〕 『註論刪補鈔』(十 21b)。これは『安樂集』(下 21b)に引用されてある。

〔註一〇一〕 同(十 21b)

〔註一〇二〕 同(十 21b)

〔註一〇三〕 同(十一 39b)

〔註一〇四〕 『往生論註私集鈔』(七 36b)

〔註一〇五〕 『淨土論』に對する此の科文に於いて、智光の不當なることと言ふまでもなく、『刪補鈔』(六 37a)には、

「私云、彼自下第二者以ニ偈頌ヲ爲ス第一一歎。爾者第一、偈頌終可レ屬ス之歟。而長行初被レ屬レ之條聊有レ疑。此註意屬レ偈見。有鈔被レ引ニ彼(智光)釋ニ事無レ詮歟。」

との批評あり、また良忠の『註記』(淨全一 48b)には

「智光分レ文全不當レ理。何爲レ指南。」

とある。

79 〔註一〇六〕 『往生論註私集鈔』(四 37b)

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)



- 〔註一〇七〕『註論刪補鈔』(16b)
- 〔註一〇八〕『無量壽經義疏』(淨全五 25b)
- 〔註一〇九〕『無量壽義疏』(淨全五 66a)
- 〔註一一〇〕『淨土宗要集見聞』(淨全十一 109b)
- 〔註一一一〕『淨土源流章』(大正八四 200b)
- 〔註一一二〕『淨土依憑經論章疏目錄』(佛全一 311b)を見ると、長西は「往生論疏五卷九十七丁、見于釋鈔一卷。」と、その丁數まで記述してゐるから、之れに依つても彼が智光の『無量壽經論釋』を見て居ることが知らるゝ。
- 〔註一一三〕長西の『論註疏』は金澤文庫に藏せられ、現にその映寫が東本願寺學院に存する。文中、所々に智光の『論釋』が引用せられてゐる。以て、長西の『論釋』を實見してゐることが窺はるゝ。
- 〔註一一四〕『論註』(下 1b)
- 〔註一一五〕『淨土論註記』(淨全一 31a)
- 〔註一一六〕『觀無量壽佛經疏妙宗鈔』(淨全五 317b)
- 〔註一一七〕『妙宗鈔』の製作年時は天禧五年八月(皇記一六八一)、知禮六十二才の述作なり。
- 〔註一一八〕『淨土論』(淨全六 635a)
- 〔註一一九〕『論註』(下 19b)
- 〔註一二〇〕同(下 19a)
- 〔註一二一〕同(下 22b)
- 〔註一二二〕『淨土論註記』(淨全一 78a)には  
 「無垢輪者今約八地已上。智光判云初地。彼則分轉。若泛談之華嚴起信同約住上、此皆分轉。今約淨心、故八地。」

との説明がある。實に巧妙なる解釋ではある。便宜上左に圖説しておかう。



〔註一三三〕『註論刪補鈔』(六 18b)

〔註一三四〕『往生論註私集鈔』(六 33b)には

「無垢輪者事、菩薩轉<sup>スル</sup>無垢輪<sup>ヲ</sup>者受<sup>メ</sup>佛說<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>故也。不<sup>レ</sup>爾者不<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>無垢義。智光云<sup>ハ</sup>初地。今云<sup>ハ</sup>受<sup>メ</sup>佛加<sup>ハ</sup>義實<sup>ニ</sup>爾也。但可<sup>レ</sup>云<sup>ハ</sup>常言顯<sup>ニ</sup>無功用<sup>ニ</sup>故指<sup>ス</sup>八地。而無垢究竟可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>佛說<sup>也</sup>。」

と融會してある。

〔註一三五〕『論註略鈔』(佛全一 33)

その論理を『私集鈔』に等しうしてゐる。

(以上、昭和十一年十一月十四日稿)

◎天親『淨土論』、曇鸞『淨土論註』、智光『無量壽經論釋』三本對照表

番 號	天親『淨土論』	曇鸞『淨土論註』	智光『無量壽經論釋』	引用書名
1	優婆提舍(1a)	梵言 <sup>ニ</sup> 優婆提舍 <sup>ニ</sup> 。此間無 <sup>ニ</sup> 正名相譯 <sup>ニ</sup> 。若舉 <sup>ニ</sup> 一隅 <sup>ニ</sup> 可名爲 <sup>ニ</sup> 論 <sup>ニ</sup> 。(上1b)	(無量壽經論釋卷第一) 優婆提舍者亦名 <sup>ニ</sup> 耶婆提婆 <sup>ニ</sup> 、此言 <sup>ニ</sup> 論議 <sup>ニ</sup> 。亦名 <sup>ニ</sup> 摩埵理迦 <sup>ニ</sup> 。此云 <sup>ニ</sup> 本母 <sup>ニ</sup> 。亦名 <sup>ニ</sup> 阿毘達摩 <sup>ニ</sup> 。此言 <sup>ニ</sup> 對法 <sup>ニ</sup> 。論伽 <sup>ニ</sup> 二十五云 <sup>ニ</sup> 云何論議 <sup>ニ</sup> 所謂 <sup>ニ</sup> 一切摩埵理伽阿毘達摩 <sup>ニ</sup> 研究甚深 <sup>ニ</sup> 善州 <sup>ニ</sup> 經義 <sup>ニ</sup> 一音 <sup>ニ</sup> 暢 <sup>ニ</sup> 一切契經宗要 <sup>ニ</sup> 。是名 <sup>ニ</sup> 論義 <sup>ニ</sup> 。	『註論刪補鈔』(一 33b)、『淨土論註』(拾遺抄)、『淨土論』(佛全一 33)

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

<p>2</p> <p>願生偈 (1a)</p>	<p>偈是句數義。以五言句略誦佛經。故名爲偈。(2b)</p>	<p>偈謂五言數矣。所謂偈者具言一偈陀。此名爲頌。以五言一略頌佛經。故曰頌矣。</p>	<p>『註記見聞』(淨全一21a)</p>
<p>3</p> <p>世尊我一心 (1a)</p>	<p>我一心者天親菩薩自督之詞。(3b)</p>	<p>(我一心者)自督策勵之詞矣。</p>	<p>『論註記』(淨全一12b)、『刪補鈔』(111a)、『論註記見聞』(淨全一21b)、『往生論註私集鈔』(118b)</p>
<p>4</p> <p>歸命盡十方無碍光如來 (1a)</p>	<p>何以知盡十方無碍光如來是讚嘆門。下長行中言云何讚嘆門。謂稱彼如來名一如彼如來光明智相。如彼名義。欲如實修行相應。故。(4b)</p>	<p>云何讚嘆門者。此文讚嘆爲正稱名爲傍。</p>	<p>『刪補鈔』(1116b)</p>
<p>5</p> <p>願生安樂國 (1a)</p>	<p>願生安樂國者此一句是作願門。乃至其安樂義具在下觀察門中。(5a)</p>	<p>(問、此安樂國去此幾處。答、經云、從此西方過十萬億佛土有極樂世界。有經云、於是西方去此世界過百千俱胝那由多佛土有佛世界名曰極樂。問、二經何故不同。答、言俱胝者此爲億也。那由多者當此間數數也。世俗言十千曰萬。十萬曰億。十億曰兆。十兆曰經。十經曰欸。欸猶是大數也。百千俱胝卽十萬億。億有四位。一者十萬。二者百萬。三者千萬。四者萬萬。今言億者卽是萬。爲顯此義。舉那由多。</p>	<p>『往生要集』(下末5a)、『安養抄』(八正八四30b)、『無量壽經鈔』(淨全十四130b)、『淨全十四200a)』</p>
<p>6</p> <p>我依修多羅眞實功德相 (1a)</p>	<p>修多羅是佛經名。(6a)</p>	<p>修多羅者無量壽經凡有二卷。則以此經爲修多羅。</p>	<p>『論註記』(淨全一11c)、『刪補鈔』(116a)、『論註略鈔』(淨全一5b)、『論註拾遺抄』</p>

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

<p>7</p> <p>說願偈總持 (1a)</p>	<p>8</p> <p>觀彼世界相 勝過三界道 (1a)</p>	<p>9</p> <p>究竟如虛空廣 大無邊際 (1a)</p>
<p>持名不散不失、總名以少攝多。(6b)</p>	<p>三界者一欲界二色界三無色界。此三界蓋是生死凡夫流轉之對宅。雖復苦樂殊脩短智異。一統而觀之。非有漏。俯伏相乘。循環無際。雜生觸受。四倒長拘。且因果虛偽相觀。安樂是善薩慈悲正觀之所。生如來神力本願之所。胎卵濕生緣。茲高貴業繫。維從此永斷。續括之權不待勸而變。乃勢謙善讓。齊普賢而同德。勝過三界。抑是近言。(8a)</p>	<p>此二句名莊嚴量功德成就。佛本所以起此莊嚴量功德者。見三小墮墜階或宮觀道。或土田通隔或志求路促。或山河隔障或國界分部。有如此等種々舉念事。是故菩薩興此莊嚴量功德。</p>
<p>陀羅尼名爲總持。持謂不散不失。(總者名)以少攝多。然此有兩種。法義忍。法者謂教。義者謂理。呪者謂詞。忍者謂智。</p>	<p>論曰、觀彼世界相勝過三界道。釋曰、其三界者、一欲界、二色界、三無色界。如此三界愚夫之宅。皆是有漏流轉無際。如幻因果相續不斷。而安樂國菩薩慈悲正觀之所由生。如來神力本願之所建立。四生感報緣。茲遠離煩惱業繫。由此永絕。其有往生修道積行。入正定聚。會無退轉。是故且言勝過三界。</p>	<p>佛者見人天昇降苦樂異處山河障隔土田狹少宮室道途有如是等種々艱難。與此願。(願我國土如虛空廣大無際。如虛空者言)來生衆生雖復無量而猶如無不增不減同虛空。</p>
<p>〔淨全一2a〕、同(3D)。論註記見聞〔淨全一2a〕。私集鈔〔1-3a〕</p>	<p>〔安養抄〕(大正八四)〔35〕、〔淨土論註記〕(淨全一2a)、同(28a)、同(13a)。 〔註論刪補鈔〕(二14a)、同(17b)。 〔論註記見聞〕(淨全一2a)。 〔往生論註私集鈔〕(130a)。</p>	<p>〔淨土論註記〕(淨全一2a)、同(19a)、同(14a)。 〔註論刪補鈔〕(二14b)。 〔往生論註私集鈔〕(123a)、同(123b)。</p>

<p>11</p> <p>同上</p>	<p>10</p> <p>正道大慈悲出世善根生(1a)</p>
<p>淨土。是彼因所得。果中說。因故名爲聖。(9b)</p>	<p>(8b) 願我國土如虛空。廣大無際。如虛空者言來生者雖衆猶若無也。</p> <p>此二句名莊嚴性功德成就。中略以羣厭禪定。故則有色無色界。(9a)</p>
<p>問云、第十地尋發心事何經論說耶。答、如此經言、其心寂靜志無所著一切世間無能及者。即悟無生忍之證也。(若)如善提心經。明四種發心。一初發心。謂入初地。二行發心。謂入三地。乃至七地。三不退發心。謂入八地。四、生補處發心。謂第十地。今法藏尋發心者當是第四一。生補處發心。(問云、彌陀淨土爲報土。爲應土耶。答云)若以本言。即是應土。已定第十地故。若以迹言。即以有漏業之所造故名報土。如實義者。是變易土。爲廣濟。故化分段用。如言阿彌陀佛壽命無量。百千萬億劫。當有終極。滅度之後。觀世音菩薩成等正覺。十地機性先已純熟。爲化彼類。即身成佛。不說先住何處。何天。後來補處。即以此身。就座成佛。是即十地所見應身。故知、安樂十地緣變易土。生彼土者。離分段中煩業。唯是法藏菩薩在第十地。無更作業。唯是現依正兩報。如言成佛之時。七寶爲地。自然而生。此是應於願力。將成佛時。方乃始成。而實不言未成佛前。欲成佛境界。其中有情爲所化土者。又言生</p>	<p>(以)悅禪(故則有色無色界。)</p>
<p>『淨土宗要集見聞』(淨全十、21b)</p> <p>『往生論註私集鈔』(110b)</p> <p>『淨土宗要集見聞』(淨全十、109)</p> <p>其他『註論刪補鈔』(30b)、『無量壽經鈔』(淨全十四、20a)等參照。</p>	<p>『註論刪補鈔』(128a)</p> <p>『安養抄』(大正八四、52)、同(八四、128)</p> <p>『淨土宗要集』(淨全十、21a)</p> <p>『註論刪補鈔』(110a)同(31b)。</p>

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

12	<p>淨光明滿足如鏡日月輪(1a)</p>	<p>此二句名莊嚴形相功德成就。佛本所以起此莊嚴功德者見日行四域之光不滿足十因。在室明不滿足十因。以是故起淨光明願。如日月光輪滿足自體。彼安樂淨土雖復廣大無邊。清淨光明無不充塞。(10a)</p>	<p>彼國者皆具相好、智惠、神通、此是不言淨土之事、因時欲有。故知應土亦是分段。然彼如來昔起願行、以土應物、今成。佛果遂能以土而應於物。當知此土即是報土。佛雖物示土、而無因不得生長。良以有情修淨土因、感斯應土、亦傳名報。</p> <p>問曰、如觀門言、如此妙花是本法藏此丘願力所成。此由花座顯淨土。以四十八願力所成。未知法藏在於何位而造而土。答曰、就往通辨、過去五十三佛之中、最初成佛、名為錠光、亦名燃燈。今能寂佛修因之時、值遇此佛、始得授記。過五十三佛、已有佛名曰世自在王佛。法藏比丘時發心。從尋鏡心、五劫修行、後起四十八願、造此土樹王下、成無上道。其成佛已過四十大劫。故知第十地菩薩、以方便發四十八願、造之、現此分段應土、接引有情。</p>	<p>淨土論註記(1-231b)、同 淨全(231b)、同 註論刪補鈔(231a)、同 往生論註私集鈔(11a)、同 其他註記見聞淨全(231b)、同(231c)等參照。</p>
----	-----------------------	--	--	---



智光の浄土教思想に就いて(下)(戸松)

<p>18 b</p> <p>正覺阿彌陀法王 善住持(1b)</p>	<p>19</p> <p>同上</p>	<p>20</p> <p>如來淨華衆正覺 華化生。(1b)</p>	<p>21</p> <p>愛樂佛法味禪 三昧爲食(1b)</p>	<p>22</p> <p>永離身心惱 受樂常無間 (1b)</p>
<p>此二句名莊嚴主功德成。佛本何故與此願。就。或國土羅和爲君則見。相敬寶輪殿則四域無虞。(18b)</p>	<p>住持者如黃鸝持子安。千齡更起。魚母念持子。逕。與不壞。(18b)</p>	<p>此二句名莊嚴眷屬功德成就。乃至或豎子婢腹出。卓榮之才。(18)</p>	<p>此二句名莊嚴受用功德成就。佛本何故與此願。見有國土或採巢破卵爲饑饉之。或懸沙指袋爲相慰之方。(18a)</p>	<p>此二句名莊嚴無諸難功德成就。佛本何故與此願。見有國土或朝預。衰籠夕悼斧鉞。或幼捨蓬黎長列方丈。(18)</p>
<p>見有國土尊豪競長土邑相鬪。輪帝照臨四方無虞。</p>	<p>言住持者。譬如陸龜思持處。水生長。魚母念持逕。時不壞。</p>	<p>寔齡首生勝秀之智矣。</p>	<p>見有國土破巢傾窠以爲饑饉。掘草採巢以爲美食。</p>	<p>見有國土朝預爵椽夕懼斧鉞。幼駭牛馬長乘車輿。</p>
<p>『浄土論註記』(浄全12b) 其他『論註記』見聞(浄全180a) 參照</p>	<p>『浄土論註記』(浄全218a) 『註論補鈔』(四52) 『往生論註私集鈔』(1120b)</p>	<p>『註論補鈔』(211b)</p>	<p>『浄土論註記』(浄全218a) 『往生論註私集鈔』(1120a)</p>	<p>『浄土論註記』(浄全218a) 『往生論註私集鈔』(1120a)</p>
<p>相好光一尋色像 超群生(2a)</p>	<p>此二句名莊嚴身業功德成就。乃至案此間詰訓。六尺曰尋。如觀無量壽</p>	<p>論曰。相好光一尋色像超群生。釋曰。如觀門言。佛告阿難。無量壽佛身如百千萬億夜摩天閻浮檀金色。乃至其相好</p>	<p>『安養抄』(大正八四180a)</p>	



<p>25</p> <p>同上</p> <p>(2a)</p> <p>同二地水火風虛空無分別</p>	<p>24</p> <p>同上</p>	<p>23</p>
<p>此二句名莊嚴心業功德成就。乃至是故願言。使我成佛如地荷負無輕重之殊。如水潤長無香括之異。如火成熟無芳臭之別。如風起發無</p>	<p>心想佛時是心即是三十二相八十隨形好者當衆生心想佛時佛身相好顯現衆生心中也。譬如水清則色像現。水之與像不異。故言佛相好身即是心想也。是心作佛者言心能作佛也。是心是佛者心外無佛也。譬如火從木出。火不得離木也。以不離木故則能燒木。木爲火燒木即爲火也。(22a)</p>	<p>經言阿彌陀如來身高六十四萬億那由他恒河沙由旬。佛圓光如百億三千大千世界。譯者以尋而計。何其晦乎。里舍間人言。箭縱橫長短。成謂橫。舒兩手臂爲尋。若譯者或取此類爲言。阿彌陀如來舒臂爲言。故稱一尋者圓光亦應徑六十一萬億那由他恒河沙由旬。……(21b)</p>
<p>言同地者。是於色境無分別心。如地荷擔不別巨細。言同水者。是於聲境無分別心。如水滋潤不簡草木。言同火者。是於香味觸無分別心。如火燒熟。言同風者。是於諸法境界無分別心。猶如風動搖不分好</p>	<p>當衆生心想佛時。佛身相皆顯現衆生心中。譬如水清即色像現而水與像不一不異。故言佛相好身即是心想。是心作佛者心能作佛。是心是佛者心外無佛。譬如火從木出。不得離木以不離木故即能燒。木爲火燒木即是火上。</p>	<p>及與化佛不具說。言一尋者謂以橫舒兩手臂爲尋。故說無量壽佛舒臂爲言耳。隨其身量圓光亦應六十萬億那由他恒河沙由旬。</p>
<p>『淨土論註』(淨全一七a)</p> <p>『往生論註私集鈔』(四二b)</p>	<p>『往生要集』(下本26c)</p> <p>『諸家念佛集』(淨全十五15c)</p>	

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

	<p>26 天人不動衆清淨智海生(2a)</p>	<p>27 同上</p>	<p>28 如須彌山王勝妙無過者。(2a)</p>	<p>29 天人丈夫衆恭敬繞瞻仰(2a)</p>	<p>30 觀佛本願力。乃至功德大寶海。(2a)</p>	<p>31 無算莊嚴光一念及一時普照諸佛會。利益諸群生。(2a)</p>
<p>眠悟之差。如空包受無開塞之念。<small>中略是故言</small>同地水火風虛空無分別。(32D)</p>	<p>此二句名莊嚴大衆功德成就。乃至於佛智慧。若退若沒以不等故。(32C)</p>	<p>海者言。佛一切種智深廣無涯。不宿二乘雜善中下死尸。喻之如海。(31a)</p>	<p>此二句名莊嚴上首功德成就。佛本何故起此願見有如來衆中或有強梁者。如提婆達多流比。或有國王與佛並治不知其推佛。(31a)</p>	<p>所以但言天人者。淨土無女人及八部鬼神。故也。(31c)</p>	<p>此四句名莊嚴不虛作住持功德成就……(32C)</p>	<p>佛本何故起此莊嚴……(37a)</p>
<p>醜。言同虛空者。是於諸法境界無分別心。猶如虛空包受一切不障。彼此。由如是等無分別故。(言同地水火風虛空無分別。)</p>	<p>於佛智慧。進退不等。</p>	<p>智海者譯。佛所有一切種智甚深廣大無有涯底。而不宿置二乘雜善中下死屍。</p>	<p>見有如來。所化緣中有不調伏之強梁者。諸國王中有不調不推佛者。</p>	<p>(淨土)有化八部。</p>	<p>(功德大寶海者)佛身所有不共功德數過塵沙。不可測知。故喻如海。</p>	<p>時者梵語劫波。此名爲時。</p>
<p>『註論刪補鈔』(六11)</p>	<p>『淨土論註記』(淨全、421)</p>	<p>『淨土論註記』(淨全、421)</p>	<p>『淨土論註記』(淨全、421) 往生論註私集鈔(四21)</p>	<p>『註論刪補鈔』(32) 往生論註私集鈔(四21)</p>	<p>『註論刪補鈔』(27) 淨土論註拾遺抄(淨全、421)</p>	<p>『註論刪補鈔』(六27a)</p>





<p>39</p> <p>云何觀察，智慧 觀察，正念觀，彼 欲，如實修，行毗 婆舍那，故。</p> <p>(3a)</p>	<p>譯毘婆舍那曰觀。但沉 言，觀，亦未，觀，何以 言，之，觀，身，無常，苦，空 無我，九相，觀，皆名，為，觀。</p> <p>(4b)</p>	<p>如四念住，觀心無常，觀受無樂，觀身不淨，觀法無我，乃至九想等念，皆為觀。</p>	<p>『淨土論註記』 (淨全 180c) 註 論刪補鈔 (八三) 往生論註私集 鈔 (五14b)。</p>
<p>云何觀察，彼佛 國土莊嚴功德，不 彼佛國土莊嚴功 德者，成，就，不 思議力，故，如 性，摩尼，如，意，寶 被，摩尼，如，意，寶 性，相，似，相，對，法 故，國土莊嚴功德，成 就，者，有，十七 種，應，知，何 等，清淨功德，成 就，清淨功德，成 莊嚴一切所求，滿 足功德成就，莊 嚴清淨功德成就 者，偈言，過三世 道，故，阿彌陀佛，略 說，彼阿彌陀佛，略 國土，十七種莊嚴 成，就，自，身，利，益，大，功</p>	<p>觀察體相者，此分中有二 體。一者器體，二者眾生 體。器分中，又有三重。 一者國土體相，二者示現 自利他，三者入第一義 諦。國土體相者，云何觀察 彼佛國土莊嚴功德，不 可思議力，故，如，被，佛 國土莊嚴功德者，成，就，不 可思議力，故，如，被，佛 如，不可思議力者，總指，彼佛 國土十七種莊嚴功德，力，不 可得思議也。如，如，被，佛 摩尼，如，意，寶，性，相，似，相，對 者，借，彼，摩尼，如，意，寶，性， 示，安樂，佛，土，不可思議性， 也。諸佛入涅槃時，以方便 力，留，碎，身，舍利，以，顯，變 為，摩尼，如，意，寶，珠，此，利，變 多，在，大，海，中，大，龍，王，以 為，首，飾，樂，佛，土，亦，如， 是，以，安樂，性，種，種，成，就</p>	<p>(就)此國土體相，更分三段。云)一顯 成就義，成就相對不可思議，二十七名 彼佛國土滿足，三願，釋體相，莊嚴清淨功 功德成就也。三願，釋體相，德成就者已 下。(成就不可思議力，故者)此莊嚴功 德力由佛淨業之所起故，下位之類不 可堪，能思惟識度。言摩尼者，此為 如意，今與體用顯相似法，摩尼就體 一名威華，二名釋迦毗楞伽，三名寶 精，威華寶者在海底金剛際下，經 日，如來正法滅已，佛舍利沒至金剛際 變為異相，釋迦寶珠，從金剛際出於 世間，上至有頂，雨華說，法，色，天，聞 下教化眾生，置十善中，亦雨七寶， 衆生見已，若觸著用，皆住三乘，利 用，還沒於地，此寶威力，映奪一切天 龍等寶，毗楞伽者，純真金也。菩薩從 假使天魔及諸毒龍，趣寶自然生於陵中， 其寶精者，從初發心，乃至十地諸功德聚，</p>	<p>『淨土論註記』 (淨全 60b) 同 (一61a)。 註論刪補鈔 (八30b) 同 (八31) (八30b) 同 (八31) 同 (八31a) 同 (八31b)。 『淨土論註拾遺』 抄 (淨全 321b)。 『往生論註私集』 鈔 (五10a) 同 (五20b)。</p>

42	41	
<p>莊嚴主功德成就者偈言正覺阿彌陀法王善住持二故。(5a)</p>	<p>莊嚴種々事功德成就者偈言正覺諸珍寶性具足妙莊嚴二故。(4a)</p>	<p>他功德成就、利益彼無量壽佛國土莊嚴第一義諦妙境界相十六句及一句次第說應知。(3a-5b)</p>
<p>此云何不思議。正覺阿彌陀不可思議。彼安樂淨土爲正覺阿彌陀善力住持。以下略 (1c)</p>	<p>此云何不思議。彼種種事或一寶十寶百千種寶隨心稱意無不具足。若欲令無輪焉化沒。心得自在。有輪神通。安可思議。(8b)</p>	<p>故。相似相對者彼寶珠力求衣食者能雨衣食等物。稱求者意。非是性滿足成就故無所乏少。乃取彼性爲喻故。言相似相對。有如是等無量差別。故言相似。觀於彼佛國上莊嚴功德成就者有十七種。中略先舉。章門。次續提釋。莊嚴清淨功德成就者偈言觀彼世界相勝過三界道故。以下略 (5b-7b)</p>
<p>正覺者指體性。即是二智。正謂實智、正證。如不二理。故。覺謂權智、覺智。一切所有法。故。阿彌陀者舉佛名字。如經中言。諸佛智慧甚深無量。乃正聲聞緣覺所不能知。故知諸佛不可思議。言法王者諸佛如來。法自在。凡有具三自在者體法自在。一者他用自在。具三自在。故名法王。又有四義。一者轉入身。</p>	<p>如此經說、其佛國土自然七寶合成爲地。乃至契經言極樂世界淨佛土中周遍大地。真金合成。乃至此就最勝。言金爲地。以如實義。七寶爲地。言三寶者。如契經言。一金、二銀、三琉璃、四頗伽迦、五赤真珠即是珊瑚。六阿濕摩揭抵婆即是馬腦。七至沙洛揭抵婆即是車乘。</p>	<p>是寶所生也。菩薩降胎。是寶先導於母胎中爲妙宮殿。隨其身而作佛事。出時亦爾。今此所言即初威華之一分也。如諸佛去世。以方便力留碎身舍利。以福有精。若其福盡則此舍利變爲摩尼如意寶珠。多在海中。有大龍王以爲首誘。相似相對者如彼寶珠。爲求財物。然則不然。實性滿足成就故無所乏少。取性義爲喻故。言相似相對。觀察彼佛國上莊嚴功德成就者有二十七種。前顯成就義畢。今第二列二十三名也。(莊嚴清淨功德者)自此已下第三顯釋體相也。</p>
<p>註論刪補鈔 (九卷)</p>	<p>安養抄 (八四)</p>	

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

	<p>43</p> <p>莊嚴眷屬功德成就者，偈言：「如來淨華衆正覺華化生。」(5a)</p>	<p>44</p> <p>莊嚴無諸難功德成就者，偈言：「永離身心惱受樂常無間。」故。(5a)</p>	<p>莊嚴大義門功德成就者，偈言：「大乘善根界等無礙嫌名女人及根礙二乘種不生。」故。淨土果報，離二種諍嫌過。應。</p>
	<p>此云何不思議。凡是雜生世界若胎，若卵，若濕，若化，眷屬若下苦樂萬品。以雜業故。彼安樂國土莫非是阿彌陀如來正覺華之所化生。同一念佛無別道。故……。(12b)</p>	<p>此云何不思議。經言，身為苦器，心為惱端。而彼有身有心而受樂無間。安可不思議。(13a)</p>	<p>此云何不思議。夫諸天共器，徹有隨福之色。足指安地乃詳金磔之旨。而願往生者本則三三品。今無一二之殊。亦如滯滯一味。焉可思議。(13b)</p>
<p>爲法身，二者破，生死顯，涅槃，三者破，邪輪，正輪，四者壞，魔網，安，眷屬。於法自在故云法王。</p>	<p>(疑云、邊地胎生者非淨華之所化生耶。答云)就機殊分有胎化。究竟論之皆是化生。</p>	<p>彼淨土中諸有情類離四魔，故無身心苦惱。由離纏魔及死魔，故身無有惱。言纏魔者是五纏身八苦之聚。言死魔者一期無常死滅之相。由離煩惱魔，故心無有惱。離天魔，故永無一切身心憂惱。以無有一切身心憂苦，故曰永離身心惱。彼淨土中諸有情類法味喜樂之所住持。謂聞所說一乘法味，生大喜樂，受持奉行，亦由證智領受理味，生大斷。以唯無量清淨喜樂，故曰受樂常無間。(無量壽經論釋卷第二終)</p>	<p>(無量壽經論釋卷第三) 莊嚴大義門功德成就者，偈言：「大乘善根界，乃至本等一相。」故。釋曰：「四王刀利受青白飯，上首天得白色飯，眷屬天得青白飯。」(而願往生者，本則三三品，今無一二之殊)亦如衆流入海一味。平等一根者，謂菩薩根如經中言：「起菩薩」</p>
<p>『淨土論註記』(淨全一63b) 『註論刪補鈔』(九2a)</p>	<p>『淨土論註記』(淨全一63b)。 『註論刪補鈔』(九17b)。 其他『論註略鈔』(淨全一25b) 參照。</p>	<p>『極樂淨土九品往生義』(淨全十五25a)。同(十五13b)。 『安養抄』(大正八四)6c、同</p>	<p>『極樂淨土九品往生義』(淨全十五25a)。同(十五13b)。 『安養抄』(大正八四)6c、同</p>





48	47	
	<p>彼無量壽佛國土莊嚴第一義諦妙境界相十六句及一句次第說應知。(5b)</p>	<p>功德力成就利益他功德成就故。(5b)</p>
<p>云何起次、建章言歸命無得光如來願生安樂國。此中有疑。疑言、生爲有本、衆生之元。棄生願生、生何可盡。爲淨釋此疑、是故觀彼淨土莊嚴功德成就、明彼淨土是阿彌陀如來清淨本願無生之生非如三有虛妄生也。何以言之。夫法性清淨畢竟無生。言生者、得生者之情耳。盡苟無生、生何所盡。盡之夫生者上失、無爲能爲之身。下離三空不空之病。根敗永亡。誠振三千、無復於斯招耻。體夫生理謂之淨土。(一五二)</p>	<p>第一義諦者佛因緣法也。此諦是境界。是故莊嚴等十六句稱爲妙境界相……(1+)(2)</p>	<p>淨</p>
<p>十疑論云、智者熾然求生淨土。達生體不可得。卽是真無生。此謂心淨故卽佛土淨。愚者爲生所縛、聞生卽作生解、謂無生卽作無生解、不知生卽無生、無生卽生。不達此理、橫相是非。此是謗法邪見人也。(故言生者是得生者情耳。又盡夫生者失、無爲而能爲之身、暗三空而不空之功。)</p>	<p>諦者佛因緣法。是因緣法假有假無非如性執。故曰第一。所言之有所言之無非。無所以是故曰義。此第一義通於諦。如此。經言通達諸法性。一切空無我。專求淨佛土。必成如是利。能成因有既二智。所成淨土亦通真俗。妙境界相者就十七種成就總別爲二。此清淨土通於二諦。諦是境界故以清淨佛土名爲妙境界相。爲說教一故。</p>	<p>力無畏等所有一切不共佛法、偏於十方無量衆生能爲無量大利益事。如是利他卽是自利故言自他功德成就。</p>
<p>淨土論註記 淨全、(51a)。 註論刪補鈔 (15a)、同(十)。</p>	<p>淨土論註記 淨全、(51a)。 註論刪補鈔 (15a)、同(十)。 拾遺抄、淨全 參照。</p>	<p>淨土論註記 淨全、(51a)。 同(十)。</p>



53	52	51
<p>何者莊嚴不虛作住持功德成就。偈言觀佛本願力遇無過者能令速滿足功德大寶海。故。即見彼佛未證淨心菩薩畢竟得證淨心菩薩等法身。與淨心菩薩與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等。故。(6b)</p>	<p>何者莊嚴心業功德成就。偈言同地水火風虛空無分別故。無分別者無分別心。故。(6a)</p>	
<p>不虛作住持功德成就者蓋是阿彌陀如來本願力也。今當略示虛作之相。不作住持之義。人有輟養土。或起。舟中積金盈庫而不免餓死。如斯之事。觸目皆是。得非作得。在非。守。在。皆由虛妄業作。不能住持也。即見彼佛未證淨心菩薩畢竟得證淨心菩薩與上地諸菩薩畢竟同得寂滅平等。故。平等法身者八地已上法性生身菩薩也。此菩薩得報生三昧。以三昧神力能</p>	<p>……凡心有知則有所不知。聖心無知故無所知。無知而知。知即無知也。(18c)</p>	
<p>夫世間。或美饌備在。而由病不受。或金玉盈滿。而以潛餓死。即見彼佛未證淨心菩薩與淨心菩薩得證淨心菩薩。寂滅平等。故。初地已上菩薩。身。寂滅平等。故。亦是變易生死。即是正智處中妙行。威神力故。法身。此菩薩得妙三摩地。無量世界。一處。念一時。周徧十方。無量世界。未證淨心菩薩者。如安樂集意。也。此菩薩願生安樂淨土。即見阿彌陀佛。見阿彌陀佛時。與上地諸菩薩畢竟身等法。龍猛世親乃至壽量願生彼。</p>	<p>言無知者無取相知。以諸法無相一故。智亦無知。(71a)</p>	<p>千大千世界。微塵數量菩薩坐之而成。正覺。無量佛所坐寶花有八萬四千花。當是四地所見之佛。由斯有言上品上生者是四地菩薩。如實義者。無量壽佛。總是十地菩薩所見。如說皆是一生補處。乃至得三百法門等。舉始指中間。應</p>
<p>『淨土論註記』 淨全(71b)、同(72a)。 『註論刪補鈔』 (120a)、同(121b)、同(123b)。 同(124b)。 『往生論註私集鈔』(六25b)、同(六26a)、同(六26a)。</p>	<p>『淨土論註記』 (淨全·71a)</p>	

智光の淨土教思想に就いて(下)(巨松)

<p>54</p> <p>同上。</p>	<p>一者於二佛土一 身不動搖而 遍十方種種應</p> <p>八地已上菩薩常在二昧 以三昧力身不動三本 處而能遍至十方供養</p> <p>：若言菩薩必從一地 至一地無超越之理一 未敢詳也。譬如有一樹 名曰好堅。是樹地生樹 百歲乃具一日。長高百 丈。日日如此。計百歲 長。豈類脩松耶。見松 生長。日向不過十。即 好堅。向能不變。即日 有人聞釋迦如來證羅 漢於一聽。制無生於終 朝。實之說。聞此論事。亦 當不信。夫非常之言。亦 不入常人之耳。謂之 不然。亦其宜也。(180)</p>	<p>一處一念一時遍十方世 界。種種供養一切諸佛及 諸佛大會衆海。一切諸佛未 證淨心菩薩者。初地已上七 地已還諸菩薩也。小略。此 菩薩願生安樂淨土。即 見阿彌陀佛。見阿彌 陀佛時。與上地諸菩薩 畢。竟身等法。龍樹菩薩 婆數槃豆菩薩。願生彼 者。當爲此耳。(180)</p> <p>譬如有一樹名曰好堅。是樹地生百圍。 乃具一日。長高百丈。日日如此。(乃至) 判於無終朝。 (無量壽經論釋卷第四終)</p> <p>『淨土論註記』 『淨全』(170)『刪 補鈔』(128)『刪 同』(129)『私 集鈔』(六301)。</p>
<p>一者於二佛土一 身不動搖而 遍十方種種應</p>	<p>八地已上菩薩常在二昧 以三昧力身不動三本 處而能遍至十方供養</p>	<p>(無量壽經論釋卷第五) 初地已上菩薩亦能以此法輪開導一切。 (如須彌住持者。須彌山)住持他四天王</p> <p>『刪補鈔』(六186) 『同』(六190)其他 『論註記』(淨全</p>

<p>55</p> <p>化、如實修行常 作佛事。偈言 安樂國清淨常轉 無垢輪化佛菩薩 日如須彌住持 故。開諸衆生 淤泥華。故。</p> <p>(6b)</p>	<p>56</p> <p>二者彼應化身一 切時不前於 後。一心念於 大光明。悉能遍 至十方世界。 教化衆生。種々 方便修行所作 滅一切衆生苦。</p> <p>(7a)</p>	<p>57</p> <p>三者彼於一切 世界。無余照 諸佛會大衆。 無余廣大無量 供養恭敬讚歎 諸佛如來功德。</p> <p>(7c)</p>	<p>四者彼於十方 一切世界無三寶 處。住持莊嚴 佛法僧功德大 海。遍示令解。</p>
<p>諸佛教化衆生。中諸法 身如日而應化身光遍諸 世界也。言日未足以 明不動。復言如須彌 住持也。(291b)</p>	<p>上言不動而至。容或 至有前後。是故復言 一念一時無前後也。 (291c)</p>	<p>無余者。明遍至一切世 界。一切諸佛大會。無有 一世界一佛會不至也。 (291c)</p>	<p>上三句雖言遍至。皆是 有佛國土。若無此句。便 是法身有所不。觀行體相竟。 (291d)</p>
<p>及切利天之義也。</p> <p>應化身者。觀音菩薩隨應示現三十三身、 爲說法化他等。於大光明者。如此經 言。彼佛國中。諸聲聞衆身光一尋。菩薩光 照百由旬。有二菩薩。最尊第一。威 神光明普照三千大千世界。此菩薩身 光。任運照三千界。若作意時。普照 十方無量世界。爲感物故。攝光照令 諸菩薩光亦復准之。如觀門言。</p>	<p>言無余者。謂能遍至一切世界。諸佛 大會。而無有一世界。佛會不至也。 供養恭敬讚嘆者。如此經言。彼國菩薩 承佛威神。一食之頃。往詣十方無量世 界。恭敬供養諸佛世尊。花香伎樂。僧 蓋幢幡無量供具。應念即至。珍妙特非世 所有。輒以奉散諸佛大會。</p>	<p>然諸大菩薩普於十方無量世界。若有 三寶處。若無三寶處。受五種生。隨其 所應。救濟有情。令修佛法。此中且 就無三寶處。菩薩受生示佛法令行。五 種生者。除灾生。乃至作大魚等。救饑饉</p>	<p>淨土論註記 淨全。76a。</p>
<p>76a。『論註略 鈔』淨全。354。 『私集鈔』(六331) 等參照。</p>	<p>『安養抄』(大正 八四141b)。『論 註記』淨全。76 a。『刪補鈔』(六 146)。</p>	<p>『安養抄』(大正 八四141a)。</p>	<p>『淨土論註記』 淨全。76a。</p>



紫磨金色願。第四願云有情容顏均等無差別願。第五願云宿命證明照了往事願。(中略)第十願云離諸妄想薩迦耶等願。謂我土中無起妄想念貪瞋等計。我所謂。第十一願云住正定聚必至菩提願。謂我土中住正定聚而不退轉。必至菩提。(中略)第十四願云眷屬聖者無數善普聲願。(中略)第十六願云離諸非愛不十念往生願。第十九願云行者命終現前導生願。謂修德願生命終佛與大眾現其人前。第二十願云聞名係念修福即生願。謂我名繫念我國積諸功德即生我國。(中略)第二十七願云殊祕珍彩嚴飾絕妙願。乃至此願就人天眾。第二十八願云見菩提無量光色願。乃至此願就一切眾。(願文)言乃至者指聲聞眾。小功德者即是人天。(中略)第三十一願云等如明鏡照見十方視者成佛。知攝生願。既云眾生寶妙香合成宮殿願。(此一願亦)就菩薩眾願。第三十三願云光明觸身得勝柔輓願。第三十四願云聽我名字證無生願。(此一願)就天人眾願。又云六往生作聖願。謂十方界修善欲生皆使來生而作菩薩。與第三十四願相似。第三十五願云聞名發心轉女成男願。第三十六願云聞名梵行皆正覺願。第三十七願云聞名修行眾所敬重願。(謂)聞名行人以為所禮。諸天世人以為能禮也。第三十八願云衣服隨念現前不整願。第三

- 同 (92 b) 同 (94)
- b) 同 (105a) 同 (106a) 同 (110 a)
- 同 (110a) 同 (111 a) 同 (111 b)
- a) 同 (111 b)
- 同 (113a) 同 (114 a) 同 (114 b)
- a) 同 (114 b)
- 同 (115b) 同 (116 b) 同 (118a) 同 (118 a)
- 同 (118 a) 同 (119 b) 同 (120 a)
- b) 同 (121a) 同 (122 a) 同 (122 b)
- a) 同 (122 b)
- 同 (123b) 同 (124 a) 同 (124 b)
- a) 同 (124 b)
- 同 (125b) 同 (126 a) 同 (126b)

略説入一法句故。一法句者謂清淨句，清淨句者謂眞實智慧無爲法身故。(7b)

略説入一法句故，上國土莊嚴十七句，如來莊嚴八句，菩薩莊嚴四句爲廣。入一法句爲略。何故示現廣略相入。諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身，二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身異而不可分，一而不可同。是故廣略相入統以法名。中略無爲法身者法性身也。法性寂滅故法身無相也。無相故能無不相。是故相好莊嚴即法身也。中略以無爲而標法身。明下法身非色非非色也。非于非者豈非非之能是乎。蓋無非之曰是也。自是非待復非是也。非是非。百非之所不喻。(24a)

十九願云。常受快樂勝如漏盡願。第四十願云。隨意照見十方諸國願。第四十一願云。聞名至佛具足諸相願。第四十二願云。聽名得淨解脫靜慮願。第四十三願云。聞名死後生尊貴家願。第四十四願云。聞名修習滿足德本願。第四十五願云。普等靜慮常見諸佛願。第四十六願云。隨意所樂聽受諸法願。第四十七願云。聽名即至得不退轉願。第四十八願云。聽名得忍諸法不退願。

(此)第四淨入願心之中，第二入一法句。(中略)。如經中言，佛眞法身猶如虛空，應物現形如水月。又龍猛說，有二種佛。一法性生身，二隨衆生現身佛。即以本迹爲二法身。由法性法身生方便法身，即以本垂迹。由方便法身出法性法身，即以迹顯本。此二法身異而不可分，一而不可同。(中略)法身惣相之異名。非一法爲一身。乃惣攝衆德爲體。(中略)以無爲而標法身，明法身非色非非色也。非於非者豈非非之能是乎。(蓋無非之曰是也。自是非待復非是也)非是非非。百是所不能是，百非所不能非。

『論註記』(淨全 72a)。『刪補鈔』(115a)、同(116a)、同(117b)。『私集鈔』(75b)。其他註論略鈔(淨全 38c)、『論註記見聞』(淨全 110a)等參照。



<p>61</p> <p>菩薩如是善知 迴向成就。即能 遠離三種善提 門相違法。何等 三種。乃至二者 依慈悲門。拔 一切眾生苦。遠 離無安眾生 心。故。(8a)</p>	<p>62</p> <p>入第三門者。以下 一心專念。作願 生彼修奢摩 他寂靜三昧行 故。得入蓮華 藏世界。是名 入第三門。 (9b)</p>	<p>63</p> <p>菩薩如是修五 門行。自利他 速得成就。阿耨 多羅三藐三菩 提。故。(10a)</p>	<p>無量壽修多羅優 婆提舍願生樹 略解義竟。 (10a)</p>
<p>障善提門者。乃至二者。中略 拔苦曰慈。與樂曰悲。 依慈故拔一切眾生苦。 依悲故遠離無安眾生 心。(27a)</p>	<p>為修寂靜止。故。一心 願生彼國。是第三功 德相。(30)</p>	<p>如劣夫跨驢不上。從 轉輪王行。便乘虛空。 遊四天下。無所障礙。 如是後名為他力。愚 哉。後之學者。聞他力可 乘。當生信心。勿自 局分也。(34a)</p>	<p>無量壽修多羅優婆提舍願 生樹略解義竟。經始稱 如是。彰信為能入。 末言奉行。表服膺事 已。論初歸禮。明宗旨</p>
<p>與樂曰慈、拔苦曰悲。</p>	<p>此第三門為修寂靜止。故。一心願生 彼國。是第三功德相。如言虛舍那佛 生蓮花藏世界。今言蓮花藏世界者。 無量壽佛所居住處。准此世界隨義為 名。即是修行安心之宅。</p>	<p>如劣夫不得上驢。願轉王行。便乘 虛空遊四天下。無所障礙。(如是等 名為他力。諸有智者。應因他力可乘。 當信心修行。)</p>	<p>論曰。阿彌陀清淨佛國土一切殊妙事。彌 陀法王一切功德願藏。諸大心人一切所修 行法。悉集往生願。修多羅章句中。今 於優婆提舍中。略解說願。西方阿彌陀 佛國論。釋曰。此第三明結造論竟。</p>
<p>『刪補鈔』 (十一32a)</p>	<p>『安養抄』(大正 八四12a)、『淨 土論註記』(淨全 五11)。 『淨土論註拾遺 抄』(淨全169b)。</p>	<p>『淨土論註記』 (淨全128a)、同 (128b)。 『註論刪補鈔』 (十一32a)。</p>	<p>『淨土論註記』 (淨全128a)。 『註論刪補鈔』 (十一32b)同(十 一100)。</p>

智光の淨土教思想に就いて(下)(戸松)

有<sub>レ</sub>由。終云<sub>ニ</sub>義竟<sub>一</sub>、示<sub>ニ</sub>所詮理畢<sub>一</sub>。述作人殊於<sub>レ</sub>茲成<sub>レ</sub>例。(34a)

夫諸經者始言<sub>ニ</sub>如是<sub>一</sub>彰<sub>ニ</sub>信爲<sub>ニ</sub>能入<sub>一</sub>。終言<sub>ニ</sub>奉行<sub>一</sub>表<sub>ニ</sub>服膺事<sub>一</sub>訖。夫衆論者初辨<sub>ニ</sub>歸禮<sub>一</sub>明<sub>ニ</sub>宗旨<sub>一</sub>所由。後言<sub>ニ</sub>義竟<sub>一</sub>示<sub>ニ</sub>所詮理畢<sub>一</sub>。經是如來所說故<sub>ニ</sub>禮與<sub>ニ</sub>義竟<sub>一</sub>、說造差別<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>是成<sub>一</sub>列。諸有智者如<sub>レ</sub>實應<sub>レ</sub>知。(無量壽經論釋畢)

『淨土論註拾遺鈔』(淨全一)②。其他『淨土論註私集鈔』(七28d)參照。

〔備考〕 ( ) 内は私に造語して補足せるもの。